

第9章 総 括

3つのアンケートから得られたデータをもとにテーマごとに分析した。最後に、各章の内容を以下にまとめ、総括とする。

第2章と第3章では、修了生・卒業生アンケートの結果から、修了生・卒業生の現状について分析した。

結果から、職場での待遇や仕事のやりがい、能力の発揮などいずれも肯定的な評価が高く、また、今の生活についても満足しているものが多く、本校の教育目標である「開発型技術者を目指す人材の育成」がある程度実現されているといえる。また、さまざまな職場において、本科卒業生は、自分の専門知識や協調性、誠実さを自負し、仕事にやりがいを持って活躍している様子が窺えた。また、彼らは、学歴に対応した待遇を受け、現在の生活をほぼ満足していることが明らかとなった。また、会社における活躍ぶりは企業からも評価されていることが明らかとなった。しかし、英語力不足等のこれから解決しなければならない課題も多いことが明らかとなった。

第4章と第5章では、企業アンケートの結果から、修了生・卒業生に対する社会的評価を分析した。

その結果、徳山高専の専攻科修了生の平均的な仕事（勤務成績）に対する評価では、採用した企業の約3分の2が勤務成績は良好であると評価しており、また、本校の教育目標に見合った実力が概ね身についていると判断されている。徳山高専の複合教育についても、“適切である”と答えた企業が82%にのぼり、社会的にもその有効性が認められていると思われる。大学の卒業生より優れている点については、“誠実さ”“協調性”といった高専卒業生の専門性よりも人間的な面を評価されていた。しかし、一つのグループとして開発や設計あるいは現場の業務にあたる場合には、これらの素養は非常に重要なものであり、高学年までホームルームが存在する高専が、大学とは異なる教育効果を生んでいる良い例であろう。一方で、「本科卒業生は、多くの企業で高い評価を受けているが1割弱は強い不満を持たれている」こと、「本校の制度・教育目標については概ね適当であり、卒業生もそれに見合う実力が付いていると評価されているが、国際理解の項目だけ企業と学校の認識にずれがある」こと、「本科卒業生は、誠実で専門知識に優れると評価されている」こと、「英語力については多くの企業で不満をもたれている」ことが明らかになった。専攻科修了生は、本科卒業生に比較すると“研究開発”の割合も多く、特に開発的な仕事を期待している様子がよく読み取れた。

第6章では、企業、専攻科修了生アンケートの結果から、高専の教育目標の評価について分析を行い、以下のことが明らかになった。

本校が行ってきた複合教育による『専門科目教育』、『卒業研究・特別研究』、『情報処理関連教育』は、専攻科修了生および本科卒業生、さらに彼らを採用した企業にとって概ね満足できるものであった。しかし一方で、教育目標の(A2)と直接関係する『教養科目教育』および『英語教育』は、これまで十分であったとはいえず、今後の教育内容の充実のために、(繰り返し言われてきたことではあるが)改善策の検討と具体的な実践が必要であると思われる。

第7章と第8章では、企業、修了生そして卒業生から寄せられた意見から在校生と教官へのメッセージ、そして、高専への提言といった観点について分析を行った。

在校生へ寄せられた意見の中で、最も多かったのが高専生活でしっかり勉強するようにというものであった。在学中は勉強に対する意欲も様々であったと思われるが、社会に出て勉強の必要性を改めて感じた人が多く、中でも英語、資格、専門知識が特に重要であると言っている。進学

を奨める意見もあり、今の技術者に求められている資質の高さが伺える。

一方、教官に望まれていることとして、授業の改善や卒業研究への指導方法改善が挙げられた。

「教育者としての勉強はされているのでしょうか」、「専門のことだけでなく、教育者としてのレベルアップも図って欲しい。」などの厳しい意見が寄せられており、今後の改善が強く望まれている。また、最新技術に関する情報や求人も含めた会社の情報の収集を行い、学生に多くの情報を提供することが望まれている。専攻科卒業生からは、専攻科の知名度を上げて欲しいという意見があった。教官への感謝の意を表した「素晴らしい教官にめぐり逢えてとても充実した学生生活でした。」「自分は教官に救われた感があるので、今のままで学生に接して欲しい。」などのメッセージも寄せられており、教官として大切なことは、常に学生の方に目を向けることであり、学生の個性を伸ばすこと、技術者を育てることに情熱を持って取り組み、自己の研鑽に励むことであると言える。

教育環境についての満足度は高く、今後は、これらの設備を用いた卒業研究、専門教育、英語教育、実験実習、パソコン教育等の更なる充実が望まれている。学生が充実した生活を送ることができ、学ぶ意欲を向上させるカリキュラムや教育システム、あるいは、これらを評価点検するシステムを構築することが必要不可欠であると言える。

以上のことから、最後にこれからの高専のあり方を考察すると、今後一層多様化すると思われる高専生の進路に対応する教育機関としてのスタイルを模索する一方で、高校、大学にない学生教育及び学校づくりについて長所を前面に押し出し、特長をもった教育機関として成長すべきであろう。また、時代の流れを読み柔軟に対応（変化）ことは大切であるが、目の前の学生の教育や研究の機関としての水準をさらに向上する努力は、その内容の透明性や成果の評価システムの確立と併せて、きわめて重要なことである。徳山高専が、どのような教育機関であるのか、卒業生や社会は、いつも期待して見守っている。これらに常に堂々と答えられるよう、今後の徳山高専の改革が進められることを期待するものである。

（担当：田村）